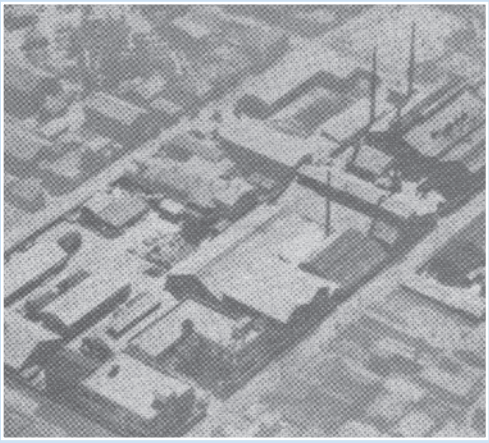
IWAKIタイムズ No.6

終戦直後の岩城硝子


蒲田工場

太平洋戦争直後の岩城硝子は、当時の国内事情同様に大変厳しい経営を強いられていましたが、成形に技術が必要な信号レンズなど、規格が厳しい製品の注文を頂くことはありました。そして、それらの注文をこなせる腕の立つ熟練のガラス職人も健在だったのですが、肝心の石炭と原料の質が大きく低下してしまい、これらから製品を仕上げるためには技術者と熔解工、双方の創意・工夫が必要でした。干天の慈雨の思いで受けたこれらの注文も実際にこなし納入するには大変な苦労があったと伝わっています。

そのような頃、当時の連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）からこんな受注を受けました。ひとつは蓋つきのアイスボックス、もうひとつはコーヒー用のパーコレーターです。

共に硼珪酸ガラスでの製造依頼だったのですが、当時の日本では原料の硼砂を入手する事が困難で、見かねたGHQから硼砂の提供を受けて何とか納入する事ができたという記録が残っています。

やっとの事で及第点をいただけた仕事でしたが、この受注により工場は久しぶりに活況を呈すと共に硼珪酸ガラスを扱う技術力を示したことが、後の大きな受注に繋がります。

そのように細々と生産を続けていた頃またもやGHQから、しかし今度は大きな仕事を請け負う事になりました。踏切設置用の表示板に使用する反射式ガラスボタンと自転車に取りつける尾灯がわりの反射鏡です。復興が進むと共に交通に関するトラブルも増加し、対策としてGHQが時の日本政府に緊急配備を命じたのです。これこそ岩城硝子が得意中の得意とする技術を活かせる仕事で社内は大いに活気づきます。しかしながら、全国に配備するための膨大な量をこなすにはそれまでの窯や工程では到底追いつきません。専用の窯の設置こそしましたがそれだけでは需要を満たす事はできません。

そこで技術陣とガラス職人が力を合わせ限られた中で最大限の生産効率を得るべく知恵を絞りました。その結果、落差を利用した自動搬送工程、成形後の製品の持つ余熱を除冷工程に利用するといったそれまでに無かったユニークな製法が工夫・考案され、まさに全社一丸となって納期に対処しました。